

「不甲斐なさが身に染みる」 ヨハネ 20：19～29

I 導入部

おはようございます。4月の第三日曜日を迎えました。今日も愛する皆さんと共に、私たちの救い主イエス・キリスト様に礼拝をささげることができますことを感謝致します。

今日の説教題は、「不甲斐なさが身に染みる」という題です。「不甲斐ない」とは、「情けないほどに意気地がない」とか、「だらしがない」、「歯がゆく思われるほど」という意味があります。似ている言葉には、腰抜け、とか臍抜けがあります。「身に染みる」とは、「からだに強い刺激を受けて痛みを感じる」という意味があるようです。

ですから、自分のだらしなさ、ふがいなさ、情けなさがからだに強い刺激を受けて痛みを感じるのです。それは、まさにイエス様の弟子たちの姿、トマスの姿、そして、私たち一人ひとりの姿ではないでしょうか。

今日は、「不甲斐なさが身に染みる」という題で、ヨハネによる福音書20章19節から29節を通してお話し致します。

II 本論部

一、どん底のあなたにイエス様は語られるのです

19節にある、「その日」とは、イエス様がよみがえられた日のことです。ヨハネによる福音書によれば、マグダラのマリアがイエス様の墓に行くと、遺体がなかった。そして、弟子たちの所へ行って、そのこと話してペトロとヨハネが墓に行くとイエス様の体を覆っていた亜麻布はあったがイエス様の遺体はなかったのです。弟子たちは、帰っていききましたが、マリアは、墓にとどまりました。そして、そこで復活のイエス様に出会ったのです。そして、イエス様が復活されたこと、「わたしは主を見ました」と告げたのです。でも、弟子たちは、そのことを受け入れて、イエス様の復活を信じるができなかったようです。

彼らは、ユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていたとあります。イエス様は、犯罪人として十字架刑につけられて死にました。マタイによる福音書を見ると、祭司長たちは、ローマ兵士に金を渡して、弟子たちが夜中にやって来て、自分たちが寝ている間に死体を盗んで行った、と証言するようという記事があります。ですから、弟子たちは、指名手配されている身であったかも知れません。ユダヤ人を恐れて、身を潜めていたのです。そのような彼らに、マグダラのマリアの「わたしは主を見ました」という言葉は何の力にもならなかったのです。

弟子たちは、恐れて家の鍵をかけて潜んでいました。鍵をかけるということは、家に入らせないということです。あるいは、この世との関係を遮断していたのです。人との

かかわりを持ちたくない。この世との関係を避けたい、ということは、誰にでもあることかも知れません。苦しい事や悲しい事を経験したり将来の事が不安になると、私たちは、一人こもったり、交わりを遠ざけようとする傾向があるのかも知れません。この時の弟子たちは、頼りにしていたイエス様が十字架刑になり、ユダヤ人の追手が自分たちに迫っているのではないかと恐れて、家に鍵をしっかりとかけていたのです。

そのような弟子たちのいる場所にイエス様は来られました。鍵を開けてではなく、戸を開いてではなく、イエス様は弟子たちの真ん中に立ち、「**あなたがたに平和があるように**」と語り掛けられたのです。他の訳では、「平安」と訳しています。挨拶の言葉です。イエス様は、そう語られて手と脇腹、つまり傷ついた箇所を見せられたのです。20節の最後には、「**弟子たちは、主を見て喜んだ。**」とあります。詳訳聖書には、「**弟子たちは、主を見て喜び（歓喜、狂喜、陶醉、有頂天）に満たされた。**」とあります。イエス様の挨拶の言葉を聞き、イエス様の十字架の傷を見て、弟子たちは、小躍りして喜んだのです。

悲しみに沈み、落ち込んでいた彼らは、喜びに満たされたのです。私たちも弟子たちのように、苦しみや悲しみ、絶望を経験すると全ての事から遮断して悲しみの中に落ちてしまいます。けれども、イエス様の言葉と励ましは私たちを喜びへと変えるのです。どのような経験をしようとも、聖書の言葉、神の言葉に触れてイエス様の声をいただきたいと思うのです。

二、私たちの弱さ以上のイエス様のご配慮がある

イエス様は、人とのこの世との関係を遮断していた弟子たち、家に閉じこもっていた彼らに、「**あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。**」と言われました。イエス様は、父なる神様から遣わされて人間の世界に人として遣わされ、私たちの罪の身代わりに十字架にかかって死んで下さり、墓に葬られ、三日目によみがえられ、神様の救いのみ業を完成されました。ご自分が父から遣わされたように、今度は、イエス様が弟子たちを遣わすと宣言されたのです。この世との関係を遮断している弟子たちをこの世に遣わすというのです。ユダヤ人を恐れ震えている弟子たちをこの世に遣わされるのです。

22節を共に読みましょう。「**そう言うってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。」**」彼らに息を吹きかけられたのです。息というのは聖霊を現す言葉です。創世記2章7節には、神様が人間を創造された時に何をされたのかを記しています。「**主なる神は土（アダマ）の塵（ちり）で人を形づくり、その鼻に息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。**」とあります。私たち人間は、息、神の霊が吹き入れられて生きる者となりました。リビングバイブルには、「**そこで人は、生きた人格をもつ者となりました。**」とあります。私たちは、神の霊によって生かされている存在なのです。

そして、23節、「**だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。**」と言われました。このことは、弟子たちに、罪を赦す力が委ねられたというのではなくて、イエス様の十字架と復活を通して与えられる罪の赦しの宣言が弟子たちに委ねられた、ということだと思ふのです。

弟子たちは、復活されたイエス様の声を聞き、その姿を見て大いに喜びました。

10人の弟子たちは、復活されたイエス様に出会って、勇気と力が与えられました。けれども、聖書は、トマスはそこにいなかったと記しています。なぜ、弟子たちと一緒にいなかったのかの理由を聖書は記していません。どのような理由があれ、トマスは、他の弟子たちと一緒に、そこにいなかったというのは事実なのです。ですから、他の10人がイエス様を見たという言葉は彼は信じることはできませんでした。詳訳聖書は、25節を「**それで、ほかの弟子たちは「私たちは主にお目にかかった」と言い続けた。」**とあります。トマス以外の弟子たちはイエス様を見た、と何回も何回も「**言い続けた。**」のです。彼らは、事実を語ったのですが、それがトマスには信じられないことだったのです。

私たちも自分だけが、仲間外れにされていると感ずることがあるかも知れません。自分だけが、他の人と意見が違ふ。自分のやり方は他の人と違ふ。そのような事を経験して、落ち込んだり、いやな思ひをすることがあるのかも知れません。けれども、それはまた、イエス様がトマス個人のために現れられたように、わたし一人のためにもイエス様が介入される時なのかも知れないのです。

三、何があっても、大丈夫。イエス様はあなたを愛しています。

弟子たちが、何度も何度も「**わたしたちは主も見た**」と言うものですから、喧嘩の売り言葉に買い言葉ではありませんが、トマスは、「**あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。**」と言ってしまったのではないのでしょうか。

自分一人だけが同じ経験をしていない時に、何を言われても理解できないのですから、共有できないのですから、いやな思ひやイライラがあるのかも知れないのです。ですから、思ってもいないことを言うてしまうこともあるのだと思うのです。

トマスは、ディディモと呼ばれるとありますように、双子、あるいは二心、物事を否定的に見る傾向がある、マイナス思考でもあったように感じます。24節の最初を原文では、「**トマス、十二弟子のひとりなのだが**」となっているのです。イエス様に選ばれた12弟子の一人でありながらも、他の10人の弟子たちの言ったことを信じることはできなかったのです。

トマスの心には、「**どうして私がいなない時にイエス様は来られたのか。私の事を嫌っておられるのか。**」とか、いろいろと考へてしまうわけですから。そのように考へると、自分も他の弟子たちのように、復活されておられるのならイエス様にお会いしたい、という強い思ひがあったのでしょう。その強い思ひ、イエス様に対する思ひがあまりにも強すぎて、「**あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。**」と言ったのかも知れないのです。

イエス様は、そのトマスの思ひ、心にある事柄、イエス様に対する熱い思ひをわかっておられたでしょう。八日の後に、また、現れて下さるのです。その間、トマスは他の弟子たちと共に過ごしました。他の弟子たちも、自分たちを信じないトマスを避けることなく、トマスも他の弟子たちを避けることなく、共に過ごし、八日目を迎えたのです。

26節には、「戸にはみな鍵がかけてあった」とあります。「みな」という言葉は、19節にはありません。彼らは、復活のイエス様に出会った。喜んだ。歓喜した。小躍りして喜んだ。けれども、前以上に嚴重に、家の鍵を皆閉めていた、というのです。復活のイエス様に出会った。大喜びしたのにも関わらず、恐れは消えず、さらに嚴重に鍵をかけていたのです。これが、現実です。本当に、彼らに力が与えられるのはペンテコステなのです。

27節を共に読みましょう。「それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」」イエス様は、8日前にトマスが言ったこと、「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」を受け入れて、手とわきの傷を見て触れるように言われたのです。トマスが言った、「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」は、ひどい言葉です。イエス様の弟子の言葉とは思えない言葉です。不信仰だ、と言われても仕方のない言葉かも知れません。でも、そのひどい言葉であったトマスの言葉、トマスの心を受け入れて、トマスが納得するような形を示されたのです。

「私の弟子なら、なぜ、あんな言葉を言うのだ。」と責められるのではなく、受け入れて下さったのです。私たちも、長い信仰生活の中で、トマスのように、あるいは、トマス以上に、イエス様に対しても申し訳ないような言葉を言うことがあるのかも知れません。でも、イエス様は、そのひどい言葉、不信仰な言葉を聞き、受け入れて下さるお方なのです。

トマスも自分が何を言ったのか覚えていたでしょう。ひどい言葉を言ったことは、トマス自身が一番覚えています。叱られても、怒鳴られても仕方のない言葉です。しかし、イエス様は、トマスの問題やマイナスを全て覆いつくすように、イエス様は愛で受け止めて下さったのです。そのことがトマスにはわかりました。「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」とイエス様に言われて、信じる者になりたいと思いました。リビングバイブルには、「いつまでも疑っていないで、信じなさい。」とあります。そう言われてトマスは、「わたしの主、わたしの神よ」と告白したのです。イエス様は続けて、「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」と言われたのです。トマス以外の弟子たちも、トマスもイエス様を見て信じました。けれども、イエス様を見ないで信じる人々、私たちもそうですが、見ないで信じる私たちは幸いなのです。それが、信仰なのです。

ヘブライ人への手紙11章1節には、「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。」とあります。私たちは、聖書が示す福音の言葉、イエス様が私たちの罪の身代わりに十字架にかかって死んで下さり、私の代わりに罰を受けて下さったので、私の罪が赦され、イエス様が死んで葬られ、よみがえられたので、私たちは神様の前に義とされ、救いが完成され、罪赦され、永遠の命、死んでも生きる天国の望みが与えられている、ということを見ないでも、信じたいと思うのです。

Ⅲ結論部

10人の弟子たちも、トマスも共に不甲斐なさが身に染みる経験をしました。どうして信じられないのか。どうして恐れるのか、と第三者の私たちは思うでしょう。けれども、私たちも、一人神様の前に立つ時、自分の信仰の不甲斐なさ、信仰者としての情けない歩み、同じように不甲斐なさが身に染みるのではないのでしょうか。表面的には、社会的にも立派なのかも知れない。肩書があるでしょう。しかし、自分という一人の人物を見る時、いかに弱く、自己中心的で、どうしようもない者であることを自分は気づくのです。けれども、イエス様はそのような私たちを愛し、否定的な言葉や行動があっても、弟子たちをトマスを丸ごと受け入れて下さったように、私たちが今どのような状況に立っていようとも、不甲斐なさが身に染みても、愛して、受け入れて、私たちを強め、祝福して、この世に遣わして下さいなのです。聖書の言葉、神様の言葉を、聖霊をいただいて、この週もイエス様と共に、遣わされた場所で、信仰を現していこうではありませんか。